

勉強記

坂口安吾

青空文庫

大震災から三年過ぎた年の話である。昨今隆盛を極めているア
 パートメントの走りがそろそろ現れた頃で、又青年子女が「資本
 論」という魔法使いの本に憑つかれた頃でもあった。生活の形
 式にも内容にも大きな転換期が訪れようとしていた。「近代」が、
 また「今日」が、始まろうとしていたのである。

涅槃ねはん大学校という誰でも無試験で入学できる学校の印度哲学科
 というところへ、栗栖くりすあんきち按吉という極度に漠然たる構えの生徒が、
 恰あたかも忍び込む煙のような朦朧もうろうさで這はい入ってきた。強度の近眼鏡
 をかけて、落着き払った顔付をしているから、何かしら考えてい
 る顔付に見えたが、総体に、このような「常に考えている」顔付

ほど、この節はやらないものはない。当節の伶俐りこうな人は、こういう顔付をしないのである。尾籠びろうな話で恐縮だが、人間が例の最も小さな部屋——豊臣秀吉でもあの部屋だけはそう大きくは拵ぢげなかつたということだ——で、何かしら魔法的な力によってどうしても冥めい想そうに沈まなければならぬような驚くべき心理状態に襲われてしまうあの空々漠々たる時間のあいだ、流石さすがに伶俐な人間も万策つきてこんな顔付になることがあるという話であるが、あの部屋に限って二人の人が同時に存在することが決してないという仕組みになっているものだから、まったくの話が、あんな勿もった体いぶつた顔付を臆面もなく人前まへへ暴さらすのは不名誉至極な話である。だから当今「常に考えている」顔付をあくまで見たいという

人は、精神病院へ行くよりほかに仕方がない。あすこの鉄格子のあちら側には即ち必要以上に考え深い人達が、その考え深いという性質や容貌を認められて、幸福な保護を受けているわけなのである。

然し、たまたま時世が時世であつたから、人々は栗栖按吉の考え深い顔付を見ると、さては、という必要以上に大きな空気をごくりと呑んで、つまりこういう顔付が刑務所の鉄格子のあちら側にある顔だと思ひこんでしまうのだつた。即ち、これが「主義者づら」だと思つたのである。

生憎あいにくなことに、この男には育ちの浅いところがあり、というのは、つまり諸々の人間はすでに数万年以前にゴリラとかチンパ

ンジーというものから人間になってしまったというのに、この先生の祖先だけは漸くようや二三百年ぐらい前にコンゴのジャングルからやおら現れてきたばかりだという面影があつた。諸君も御承知であろうけれども、ゴリラとか獅子とかがま蟻とか、みんな考え深い顔付をしている。あの顔付は危険だ。動物園の鉄格子の外側へ野放しにして、所もあろうに涅槃大学の印度哲学科でもうひと苦勞考える苦勞を重ねるといふ、思い余つた挙句には突然爆裂弾を投げつけたりピストルを乱射したり、それはもうみんなこの顔付のてあいなのである。穩良な坊主の子弟のことだからこの怪物の入学には一方ならずおび怯えた形で、だから少しぐらい神経衰弱になつても試験のある学校へ行くべきであつたと今更嘆いてみたのであ

ったが、栗栖按吉に話しかけられることがあると、気の毒なほどひやりと顔色を変えるのであった。が、幸いにして、読者ももとより御承知の通り、薑やゴリラはめつたに人に話しかけない

栗栖按吉という男が、この時まで、何処どこで何をしていたかということになる、これが皆目分らない。筆者も色々調べてみたが、どうも、さっぱり分らない。このとき二十一歳だったが、それでも誰だったかの話によると、その前年のことであるが、大菩薩峠にほど近い奥多摩山中の掘立小屋、これは伴某という往年の夢見が奥多摩の高原を牧場にし峠から谷底まで牛でうようよさせるつもりで建てた小屋だということだが、牛なんか、まことにもつて胸がすくほど、一匹もないじゃないか。ところがこの掘立小

屋を借り受けて、霧を吸い木の芽をくい、弓でもってモモンガーを退治してすき焼をつくり、人間は一ヶ月五円でもって楽々と生活ができるものだど悟りをひらき、勿体ぶった顔付をして深山を散策したり本を読んだりしていた男が、どうもこの男じゃなかったかという話がある。この小屋には燈火がないから、日が暮れると、突然ねてしまうほかに手がないのだ。と、ここにこの男は容易ならぬことを発見した。というのは、この男が眠っている顔の真上に当る棟木に、毎晩一匹の蛇がまきついているのを発見したわけである。昼になるともう姿がないところを見ると、蛇のねどこに相違ないが、蛇だつてまき加減の具合や何かで悪夢を見るかも知れないからアツというまに足いや腹をすべらして墜落したら、

いやこれはもう目も当てられない。この男が悟りをひらいていない証拠には、暗闇の部屋の片隅で、真剣な懊^{おのう}惱の様子といたらないのである。数日後には風にまぎれて山から姿が消えてしまった。それから涅槃大学へ現れるまで、とんと見た人がなかったのである。

涅槃大学の印度哲学科には十三人の生徒がいた。栗栖按吉という場違い者を除いてみると、あとはみんな素性の正しい坊主であった。

坊主の子供が大学へはいる。一番先に何をする。一番先に毛を延すのだ。必要以上にポマードをたっぷりつけて、ああ畜生めなんだって帽子などいう意味のはつきりしないものがあるのだろうか

と考えるのだ。と、容易ならぬ事件が起きた。突然栗栖按吉がクリクリ坊主になって登校したのである。これはもう革命を愛する精神だ。十二人の同級生は悲憤の涙を流したのだった。

まったく、なさけなくなるのである。栗栖按吉は小学校の一年生と同じように大きな帽子をかぶっている。帽子の中には新聞紙が三日分も折りこんであるのである。按吉は教室へ這入ってくるど、やがて大きな帽子をぬぎ、ハンケチを持たないから、ポケットから鼻紙をだして、クリクリ坊主をふくのであった。

もつと

尤も栗栖按吉がクリクリ坊主になったのは革命を愛する精神のせいではなかった。彼なみに、やむべからざる理由があったためなのである。頃はすでに初夏だった。長い頭髪がなかったら、き

つと涼しいに相違ない。或朝按吉はふと考えた。その上彼は当時神経衰弱の気味があつて、頭に靄もやがかかつていて、どうもはつきりしてくれない。人間はゴリラやライオンに比べれば確かに頭脳優秀であるが、ゴリラやライオンが床屋へ行くということを経もきいた人がない。だから頭髪は刈るべきである。否、剃そるべきであるのである。するともうきつと頭が良くなるのだ。——床屋の親父は迷惑した。剃かみそり刀のいたむことといったらもの三日も研がなければならぬだろう。そこで彼はこう言った。

「ねえ旦那。頭に傷がつくかも知れないね。なにぶん頭というものは、唐茄子とうなすぐらいでこぼこのものがすよ。ヘツヘツへ」

「或る程度まで我慢します」と、按吉は冷静に答えたのだった。

頭には頭蓋骨というものがある。頭を剃るといふこととハムマーで殴ることとは違ふから、脳味噌に傷のできる憂いはない。それを充分心得ている顔付だった。フレンド軒は横を向いて息をのんだ。この唐変木とうへんぼくめ、御好み通り傷の十は進上してお帰しするかから覚えていると心に決めてしまったのだった。

ところで栗栖按吉はここに奇怪な発見をして度を失った。というのは、毛髪を失った頭の熱いことといったら、これを一体誰が信じてくれるだろう。普通汗をかくというが、クリクリ坊主の頭からは汗が湧出し流れるのである。目へ流れこみ、鼻孔をふさぎ、口へ落ち、耳にたまり、遠慮会釈もなく背中へ胸へ流入する。これはもう頭自体が水みず甕がめにほかならないと信じるようになるので

あつた。

人体に於て最も発汗する場所はどこか？　頭！　毛髪はなんのために存在するか？　汗をふせぐためである！　ああ。医学博士でも生理学者でも、ここまで知っている筈はない。なぜなら彼等には毛髪があるから。——まったくもって栗栖按吉の思考にうっかりこだわっていると、私まで愚かな奴だと思われてしまう。私は急いで話をすすめなければならぬ。

無意味な先生は誰かと云えば、先生よりも物識りものしの生徒の先生と、涅槃大学の印度哲学科の先生であつた。ここの生徒は耳と耳の間が風を通す洞穴になつていて、風と一緒に先生の言葉も通過させてしまう。然し先生はそんなことを気にかけない。先生は

喋るために月給をもらっているが、教えるために月給をもらっていないからであった。

こんなにあつさりしたクラスに、先生の言葉を真剣にきいている生徒がいたらどうだろう。実際笑止で、気の毒なほど惨めなものだ。耳と耳の中間の風洞に壁を立て、先生の言葉をくいとめようと必死にもがいているのである。なんのためだか、てんで意味が分らない。一目見て、これはもう助からないほど頭の悪い奴だという印象を受けてしまうのである。第一こいつは何のために学校へ来ているのだろう。あまりのことに——いや、まったくだ。物質の貧困よりも、このような精神の貧困ほど陰惨で、みじめきわまるものはない。そこで先生は泣きだしたいほどがっかりして、

学生の本分とは何か、とか、学校の精神は何か、もつと正々堂々たれ、惨めであるな、高邁こうまいなる精神をもて、そんなことを口走りたくなるのであつた。

即ち栗栖按吉がこのようなたつた一人の惨めな生徒であつたのである。

尤ももつとこんな男でも、たつたひとつ效能のあることが分つてきた。というのは、涅槃大学の印度哲学科というところは、時々先生がわざわざ三十分も遅れたあげく教室へ出向いてくるのに、生徒の影がひとつもないということがあるのであつた。即ち坊主の子供達は就職の心配がないのであるし、世襲の職業に情熱や興味を持つていないからなのである。時間制の月給をいただいでいらつ

しやる先生達は、人のいない教室に四五十分もうたたねしたり鼻唄うたったりしながら風をひいたりするのであった。そこで教務課長というような人が級長を呼び寄せて言うのである。君達の立場は分るのであるが、など同情深く口籠ったりしながら、籤引きくじびで受持ちの講義を決めるのはどういふものだね。つまり各々の講座には必ず一人の学生が決死の覚悟で出席する。いや、即ち君、これは学生の義務というものじゃからね、などと言ひ渡すのだ。と、栗栖按吉のクラスでは、まさにその心配がないではないか。

ここに坊主の子供達が御布施をくれたって俺はでないねという講座が二つあるのである。梵語ぼんごと巴利語パーリの講座であった。ところ

が栗栖按吉が何より情熱傾けてこの講座へせつせと通う。調べてみると、一日に七八時間も文法書をひっくりかえしたり辞書をめくっているという話なのである。梵語の先生は大変心のやさしい方であった。新学期の第一日新入生を大変やさしくにこにこ見渡して（この時だけは一同出席していた）梵語というものは何年おやりになっても決してうだつの上らないものでございます、と仰おつしや有るのである。四五年前大変熱心に勉強なすったお方がありまして、今もって私のところへここはどうだ、これは何だ、とおききにいらつしやいます。この方は日がな一日梵語の勉強をなすつていらつしやる、ところが梵語は辞書をひけるまでがまず一苦勞なかなかな却々探す単語がおいそれと辞書から顔を出しません。いやはや

梵語学者と申しましても、みんなそれぞれ怪しいものでございませぬ、と仰有るのである。だからもう決して無理に梵語の勉強をおすすめは致しませんと、大変やさしく親切に言葉をつくして仰有るのだった。これでも梵語に出席しようという奴は、馬鹿でなければ礼節を知らない無頼漢のひとりであるに相違ない。

けれども先生はやさしい心のお方だから、二学期になつたというのに、まだひとり生徒が出席していても、決してお怒りにならないのだった。いつもやさしく、にこにこ講義をつづけて下さるのだが、幾分薄気味わるくお思ひになるのであろう、というのは、この男が思い余つた顔付をして質問したりするからで、この男が首をあげて今にも物を言いそうになると、先生は吃驚^{びっく}りなす

つて目をおそらしになるのであった。

梵語とか巴利語はなるほど大変難物だ。仏蘭西語フランスは動詞が九十幾つにも変化するということだが、そんなもの梵語の方では朝めし前の茶漬けにもならないという話なのである。それというのが後年栗栖按吉が仏蘭西語の勉強をはじめたからで、このような鈍物でも、梵語の方で悩んできたあとというものは恐しい。九十幾つの変化なんていやはや、どうも、やさしくて仕方がないのだ。覚えまいと思つていても覚えるほかに手がないう始末である。だから栗栖按吉は仏蘭西語を勉強しようという人に、こういう風に言うのであった。キ、君々々。ボ、梵語を一年も勉強してから仏蘭西語としやれてみる。あんなもの、朝めし前の茶漬けだけ。

え、おい、君。

梵語の方では名詞でも形容詞でも勝手気儘に変化する。ひとつひとつが自分勝手と言いたいほど不規則を極めている。だから辞書がひけないのである。

按吉はどこでどうして手に入れたかイギリス製の六十五円もする梵語辞典を持っていた。日本製の梵語辞典というものはないのである。これを十分も膝の上でめくっていると、膝関節がめきめきし、肩が凝^こって息がつまってくるのであった。これを五時間ものせている。目がくらむ。スポーツだ。探す単語はひとつも現れてくれないけれども、全身快く疲労して、大変勉強したという気持ちになつてしまうのである。単語なんか覚えるよりも、もつと実

質的な勉強をした気持になる。肉体がそもそも辞書に化したかのような、壮大無類な気持になつてしまふのである。

按吉の机の上にはこれも苦勞して手に入れた「ラージャ・ヨーガ」という梵書とその英訳が置かれている。もう半年も第一頁を睨にらんでいて、その五行目へ進むことができないのだった。

先生はやさしい心のお方だから、時々按吉をいたわつて下さるのである。

「いまに原書が読めるようにならうでしょう」先生はにこにここと仰有るのだった。

「もうひと苦勞でございます」

然し按吉にしてみると、六時間も七時間も辞書をめくつた挙句あげく

の果に、ようやくたつたひとつの単語を突きとめて凱歌がいかをあげる程だったから、この先二苦勞や七苦勞で原書がお読めになるところまで行けないことを知っていた。そこで按吉の釈然とせぬ顔付を見ると、先生は更にいたわって下さるのである。

「いえいえ。梵語はもうそれで宜よろしいのでございます」先生はにこにこ仰有るのだった。「皆さんもう同じことでございます。

五年十年おやりになつても、皆が皆まで引いた単語が現れてくれるというわけには却々なかなか参るものではございません」

これは又心細い話である。これでは却々釈然と笑うわけにはいかないのである。そこで先生は益々浮かない顔付の生徒を見て、益々やさしく、いたわって下さる。

「梵語はあなた、まだまだ楽でございます」先生はにこにこ仰有るのである。「チベット語ときたら、これはもう私はあなた、もう満五年間というもの山口恵海先生に習っているのでございます。単語がもう何から何までひとつひとつが不規則変化。いまだに辞書がろくすっぽ引けは致しません。それでも帝大で講義致しております。大変つろうございます」

先生は帝大でチベット語の講師を務めていらつしやるのであつた。先生がいつもにこにこしていらつしやるので、浮かないながら、按吉は次第に心気爽快になつていた。文法もよくお知りにならず、辞書もお引けにならなくとも、帝国大学で講義していらつしやるのである。チベット語や梵語というものは、辞書が引けず、

読むことができなくとも、ちゃんとそれで読めている結果になっているのかも知れぬ。そうして栗栖按吉は辞書もろくに引けないうちに、ちゃんと原書を読んでいる気持になってしまふのだった。

そのころ、栗栖按吉は不思議な学者と近づきになった。

この学者はゴール共和国のラテン大学校の卒業生で、言語学者であつた。東洋の二十数ヶ国語に通じているという話なのである。鞍馬六蔵という大変雄大な姓名だったが、いかにも敏捷な学者らしく、五尺に足りないお方であつた。

鞍馬先生は追分の下宿を二室占領して数千巻の書籍と共にくすぶっていたが、朝になると、大概脱脂綿にアルコーンをしめして、

丁寧の本を拭いていらつしやる。というのは、最近鞍馬先生に夢遊病の症候が現れて、先生は夜中無意識のうちに歩行し、最も貴重な本箱に向つて放尿し、またお眠りになる。そこで先生は毎朝目を覚して仰天し、アルコールで本をふく始末になるのであつたが、夢遊病はとにかくとして、貴重な書物に放尿するに至つては、どうにも悲痛なことである。要するに夜中尿意に悩まなければいゝのであるから、先生は午後になるとお茶をのまず、その上部屋の四隅へ洩瓶しゅびんを置いたが、無意識中における先生の意志はどうしても本に向つて放尿せずには納まらない。生の馬肉やオツトセイの肉などを食ひ、遂に赤蛙の生きた奴を食うところまで心をきめたが、どうしても食いたくないという意志などがあつて、相反

目せる精神がひとつの人体内に於てまき起す争いの結果は乱暴だ。食べられたくない赤蛙よりも、これを食べようという先生の方が、より以上に慌しくあわただ惨澹たる悪戦苦闘をするのであった。

孤独の先生は思うに弟子が欲しかったのだ。けれどもペルシャ語だの安南語などいうものは、先生の方が月謝を払っても習ってくれる者がない。だから遂に見出したたった一人の弟子、栗栖按吉をいたわってくれることといたら涅槃大学の梵語の先生も及ばないという風がある。

「その程度なら、君、語学を専攻するだけの天稟てんぴんがある」と、先生は梵語の手並をためした上で、こんな思いきったお世辞を言う。涅槃大学の梵語の先生と違って、決して笑わないから、言

葉がみんなほんとのような気がするのだった。「ラテン大学の言語学科は全世界の天才が集ってくるが、中には丁度君程の才能しかない男がいたです。一年そこそこでその程度なら、日本では梵語学者になれるな」

先生の言葉はなんとなくあらゆる物に心安い感じを起させる。ラテン大学の天才だの安南の哲学者だのネパールの王様だのというものが友達のような気がするのである。日本の梵語学者なんでもものは、どうも、俺の弟子に当る男じゃなかったかな、などいう気持ちについてしまふのだった。

ところが先生は按吉に向って、大いに見込みがあるからチベットの語を伝授しようと言う。二十世紀に仏教を勉強するほどの者な

ら、先ずチベット語をやらなければ話にならない、と仰有るのである。梵語や巴利語の文献はいくらかも残存していないが、仏教関係の文献は殆んど全部チベット語に訳されて伝わっている。だから仏教はチベットから這入らなければ二十世紀の学者として真ほんも物の物じやないと仰有るのだった。

生あいにく憎なことに按吉はもはや印度哲学にそろそろ見切りをつけだしていた。とても悟りがひらけそうもないからである。頭の毛もそろそろ生え揃ってきたし、これを機会に印度の方と手を切つて、仏蘭西とか独逸ドイツとか、ハイカラなところと手を握ろうなど考えだしていたのであった。すでに印度界限にとんと情熱がもてないところへ、それが専門の帝大の先生でも、まだ文法もよくお知

りにならず、辞書もお引けにならないと仰有る。なるほど辞書はひくために存在するのであるけれども、言葉は辞書をひくために存在するのではないようである。梵語やチベット語の辞書をひくのは健康に宜しく食慾を増進させ概してラジオ体操ほどの効果があるとはいうものの、辞書は体育器具として発売されたものではない。そこで栗栖按吉は大汗かいてチベット語の伝授を辞退することに努めたが、鞍馬先生という方は他人にも意志だの好き嫌いだのというものがあることなど、とんと御存じないのである。

「いや、君々」と先生は仰有る。「チベット語は仏教のために存在する言語ではないです。君、興味の無い印度哲学は即座に止すべきところだね。そしてチベット学者になりたまえ。元来チベッ

ト語の話せる人は日本に四五人いるいないの程度だぜ。即ち君は六人目だな。一ヶ国語に通じることがはその国土と国民を征服したことになるんだぜ。そうだろう。君」

どうも先生の話はうますぎる。おだてには至って乗り易い按吉だったが、言葉を征服すれば国土と国民を征服したことになるという、女の人に道を尋ねて女の人返事をしてくれれば、女の人をわが物にしたことになるというのと同じようなものじゃないか。尤も按吉が六人目のチベツト学者になりかねないのは正真正銘のところらしく、即ち帝国大学の先生が文法もよくお知りにならず、辞書もおひけにならないことでも大概察しがつくのであった。

丁度そのころチベツト語の大家山口恵海先生の所説で、古来か

ら高麗人こうらいびとと称よびならわしていた帰化人たちがチベット人ではな
いかという発表があつた。現に高麗の言葉というウズマサだのサ
イタマだのという地名がチベット語であるし、カグラ、サイバラ
がチベット語で、あの文章のヤというかけ声のようなものが卑猥
な意味をもったチベット語だといふのである。サンバソウがチベ
ット語で「トウトウタラリ」の全文がそっくりチベット語にほか
ならず、現にチベットに於ては、これとほぼ同じような踊りが行
われていると言ふのであつた。

この程度にわが国の古い文化に密接な関係があつてみると、鞍
馬先生のうますぎるおだてに乗るのは危険だと思ひながらも、つ
い六人目の学者になるのも満更ではなさそうだといふ大きな気持

になるのであった。

さあ按吉がチベツト語の伝授を受ける快諾をすると、先生の勇み立つこと、それ教科書だ、辞書だ、文法書だ、参考書だ、チベツトの事情に関する紹介書だ、これもやる、あれもやると按吉の膝の上へ積み重ねてくれる。と、按吉がこれをひそかに注意を怠らずにいたところが——というのは、これが相当問題が臭いからで——先生がこれらの書物を忙しく取り出してくる場所が、決して本箱の腰から上に当る場所ではないではないか。してみればこれはもう洗礼を受けたあれである。けれども学問の精神は遙か高遠なところにあるべきだから、按吉は膝の上の書物がたしかに湿つていても、これは神秘的な書物だから汗をかいているのだなどと考

える。印度では糞便の始末を指先でするほどだから言語も多少は臭いなど自ら言いきかすのであつた。

ところが、不思議な因縁で、チベット語はたしかに臭いのであつた。というのは、先生は大変放屁をなさる癖があつた。伝授の途中に「失礼」と仰有つて、廊下へ出ていらつしやる。戸をぴしやりと閉じておしまいになるから、廊下でどのような姿勢をなすつていらつしやるかは分らないが、大変音の良い円々とした感じのものを矢つぎばやに七つ八つお洩らしになる。夜更けでも陰気な雨の日でも、先生のこの音だけはいつも円々としていて、決して濡れた感じや掠れた響きかすをたてることがないのであつた。それから廊下をなんとなく五六ぺん往復なすつていらつしやるのは充

分臭氣の消え失せるまで姿を見せまいという礼節と思いやりの心から出た散策であろう。やがて部屋へ現れて、また「失礼」と仰有つて伝授をおつづけになる。

ここで筆者は日本帝国の国威のために一言弁じなければならぬが、帝国大学の先生が辞書がおひけにならなくともそれは日本帝国の不名誉にはならないという事である。なぜならば、ラテン大学校の秀才も、やつぱり辞書がおひけにならないからであつた。先生は親切な方だから、生徒の代りに御自分で辞書をひいて下さる。按吉の面前でももの二三十分も激しい運動をなすつていらつしやるが、なかなか単語が現れてくれないのである。そのうち失礼と仰有つて廊下へ出ていらつしやる。屁をたれて、なんとなく

廊下を五六ぺん往復なすつて、また失礼と仰有つて、辞書を抱えて激しい運動をなさる。やっぱり単語が現れない。

そのうち按吉はチベット語の辞典といえは学者の健康のために作られたものではないかという風に考えていて、一分や二分で単語を探しだしてしまうのはチベット語本来の性質にそむくものだという風に思っていたから、先生の激しい運動に対しても決して先生がお出来にならないせいだななどと思うことはなかったが、然し先生が失礼と仰有つて廊下へ出ていらつしやる。なんとなく廊下を五六ぺん往復なすつて、また失礼と仰有つて戻つていらつしやる。その先生の礼節がしみじみといたわしく、大変佻^{わび}しくてならないのだった。そこで按吉は或る日言った。

「先生、放屁は僕に遠慮なさることは御無用に願います。かえつ却て僕がつらいですから」

すると先生はその次放屁にお立ちのとき障子を開けようとして手をかけてから按吉の言葉を思い出されたのであろう、それではと仰有つて振向いて、障子に尻を向けておいていつもの通り七ツ八ツお洩らしになった。そうして、その後はこの方法が習慣になったのである。ところがここに意外なことに、按吉は従来の定説を一気にくつがえす発見をした。これに就いては物識りの風来山人まで知ったか振りの断定を下しているほどであるが、大きな円々と響く屁は臭くないという古来の定説があるのである。ところが先生の屁ときたら、音は朗々たるものではあるが、スカンクも

悶絶するほど臭いのである。即ち先生がなんとなく廊下を往復なすつていらつしやつたのは、蓋しけだ自ら充分に御存じのところであつたのだらう。学問の精神は高邁こうまいなものであるけれども、ここに於て按吉は、チベット語の臭氣に就いて悲痛な認識をもたなければならぬのだつた。その頃の按吉の日記の中の文章である。

外は晴れたる日なりき

今日も亦またチベット語を吸いて帰れり

この二行詩はいくらか厭世的である。先生の放屁にあてられて、彼は到頭とうとう思わぬ厭世感にかりたてられていたらしい。按吉はこの二行詩が出来上るまで詩というものを作つたことがなかつたのである。ところが彼はこの時にわ俄かにこの世には散文によつては表

明しきれない何物かが在ることを痛切に知ったのである。即ちチベツト語と屁の交るところの結果の如き、これは散文の能力によつては如何とも表明することが不可能ではないか。こうして彼は意外にもチベツト語と屁の交るところの結果から詩の精神を知り、また厭世の深淵をのぞいた。人間は、どこで、何事を学びとるかまことに予測のつかないものだ。

この伝授がもう一年間もつづいたら按吉は厭世自殺をしなければならぬような結果になったかも知れなかつた。ところが、ここに天祐神助あり、按吉は一命をひろつたのである。

天祐神助は先生が童貞を失つたことに始まる。先生は花の巴里に於てすら童貞を失わず、マレーの裸女にも目を閉じて、堂々童

貞を一貫し無事故国へ辿りついてきたのに、こともあろうに凡そおよ安直な売春婦を相手にして、三十数年の童貞をあつさり帳消しにした。

その結果、次のような理由によつて、先生はまったく厭世的になつたのである。即ち先生は按吉に言つた。

「なんだ君。交接というものは実にあつけないものじゃないか。快感なんか、どこにあるのだ。君、そうじゃないか。馬鹿にしてやがる。僕は君、あの時だけは、世界中の言葉という言葉が総がかりになつても表現しきれない神秘的な感覚があるのだと思ひこんでいたんだぜ。僕は君、一生だまされていたようなものだ。僕はもう、つくづく都会の生活がいやになつたな。くにへ歸つて、暫しばら

くひとりで考えてくる」

先生自体が神秘すぎて、按吉には、先生の厭世の筋道や内容がどうもはつきり呑みこめなかった。世界中の言葉という言葉が総がかりになつても表現しきれない神秘な感覚というものをどうして三十何年も我慢していらつしやつたのか分らないし、その予想が外れたからといってどうして故郷へ帰らなければならぬのかでんでわけが分らない。一生だまされていたなどと大変なことを言つて嘆いていらつしやるが、誰がどういふ風に騙だましていたのか一向わけが分らない。先生がこんな大変なことを言つて嘆いているのをきいていると、先生が言葉という言葉をみんな覚えようとしたのは、つまりそれを総がかりにしても表現しきれないよう

なことを、実はどこかに表現されているのだと感違ひしてせつせと勉強していたようにも思われるし、三十何年も童貞を守つていたくせに、実のところは先生年中そのことばかり考え耽^{ふけ}つていたようにも思われるし、これはもうてんでわけが分らないのだ。

とにかく分らないことばかりだが、按吉の身にしてみると、これでもにかく、こつちの方は自殺がひとつ助かったという甚だ明朗な事柄だけが沁^{しみ}々^{しみ}分つてきたのである。青天白日の思いであった。そうして先生が童貞を失つてくれたことを天帝に向つて深く感謝する思いによつて心は暫くふくらんでいた。先生の相手をつとめた売春婦にお礼を述べたいものだななどと、忘恩的なことを一向に平然として考えているほどであった。

尤も先生が童貞を失つてくれたおかげで、名誉あるわが帝国にはひとりの奇怪なチベット博士が生れずに済んだという国民ひとしく祝盃を挙げなければならぬような隠れた功績もあるのであった。

その昔、泉州堺の町に、表徳号を社楽斎という俳人があつた。仙人になる秘薬の伝授を受け、半年もかかつて丸薬をねりあげて、朝晩これを飲んだあげく、もうそろそろ飛行の術ができるだろうというので、屋根の上から飛び降りて、腰骨を折ってしまった。この時以来、できないことをするを「シヤラクサイ」ことをする、というようになったという話である。

按吉は、時々深夜の物思いに、ふと、俺はどうも社楽齋まつえの未い裔いじゃないかなどと考えて、心細さが身に沁むようになっていた。若い身そらで、悟りをひらこうなどは、どう考えても思慮ある人間の思想じゃない。第一、辞書だの書物の中に悟りが息を殺して隠れているということは金輪際ではないか。その昔、猿の大王だの豚の精だのひきつれて、こういう思想で、天竺てんじくへお経をとりでかけた坊主もいたけれども、あそこには生死をかけた旅行があつた。按吉ときては、電車にゆられて学校へ行くだけではないか。

第一、印度の哲人達を見るがいい。若い身そらで、悟りをひらこうなどと一念発起した青道心はひとりもない。どれもこれも、

手のつけられない大悪党ばかりである。言語道断な助平ばかりで、
 まず不惑ふわくという年頃までは、女のほかの何事も考えるということ
 がない。仏教第一の大哲学者は後宮へ忍びこんで千人の美女を犯
 す悲願をたて、あらかた悲願の果てたころに、ようやく殊勝な心
 を起した。これにつづく更に一人の大哲人は、母親を犯してのち
 に、ようやく一念発起した。おまけにこの先生ときては、天あつぱれ晴
 悟りをひらいて当代の大聖人と仰がれるようになってから、夢に
 天女と契ちぎりをむすんで、夢精した。これを弟子に発見されて有象うざう
 無象むざうにとりかこまれて詰問を受け、聖人でも夢と生理は致し方が
 ないものだとしてフロイド博士に殴られそうなることを言つて澄してい
 る。徹頭徹尾あくどい聖人ばかりであるが、按吉は我身と社楽齋

のつながりに就て^{ついで}ひそかに心細さが身に沁むたびに、このことに就て、特にこだわらずにはいられなかった。社楽齋がいきなり仙人になることは先ず以て不可能だが、大悪党が聖人になることは確かに不可能ではない筈だ。

ところで、話は別であるが、印度の哲人とは違つた意味で、日本の坊主が、実に又、徹頭徹尾あくどいのである。

仏教の講座に出席する。先生方はみんな頭の涼しい方で、なかには管長^{げいか}猥下もあり、衣をつけて教室へでていらつしやる。一切皆空を身につけて、^{さすが}流石に悠々、天地の如く自然の態に見受けられたが、淡々として悟りきつた哲理の解説にも^{かかわ}拘らず、悟りの明るさとか、希望とか、そういうものの爽快さを、どうしても感じ

ることができなかつた。そうして、それを感じさせない障しょうがい碍がいは、哲理自体にあるのではなく、それを解説していらつしやる先生方の人柄——むしろ、肉体（実に按吉はその肉体のみはつきり感じた）にあるのだと確信するより仕方がなかつた。実に、暗い。なにかしら、荒涼として、人肉の市にさまようような切なさであつた。不自然で、陰惨だつた。

按吉は、時々、お天気の良い日、臍せいかたんでん下丹田でんに力をいれて、充分覚悟をかためた上で、高僧を訪ねることが、稀にはあつた。坊主は人の頭を遠慮なくぶん殴るといふ話で、三十棒といたりして、ひとつふたつと違うから、出発に際して、充分に覚悟をきめる必要などがあつたのである。天日ためにくらし、とはこの時の

ことで、良く晴れた日を選んで出ても、道中は実にくらく、せつなかつた。けれども流石に高僧たちは、按吉のような書生にも、大概気楽に会ってくれたし、会ってみれば、実に気軽のうちとけて、道中の不安などは雲散霧消が常だった。そうして、各の高僧達は、各の悟りの法悦をきかせてくれた。けれども、ここでも、やっぱり人肉の市をさまようような切なさだけは、教室の中と變りがなかつた。

こういう立派な高僧方にお会いすると、どういうわけだか、人間とか、心とか、そういうものを感じる前に、いきなり肉体を感じてしまう。この世には温顔という言葉があるが、その實際が知りたかったら、高僧にお会いするのが第一である。即ち、肉体は

常に温顔をたたえ、さながら春の風、梅花咲くあのやわらかな春風をたたえていらつしやる。そうして、お別れしてしまうまで、肉体の温顔が、ただ、目の前いっぱい立ちふさがっているのである。そうして、肉体の温顔が、ニコニコと、きさくに語って下さるのである。ナニ、美女もただの白骨でな、と、肉体の温顔がニコニコと仰有る。又、あるときは、これを逆に、イヤ、ナニ、美女のやわらかい肉感というものは、あれも亦よろしいものじゃヨ、と、こう仰有って大変無邪氣にたのしそうにニコニコとお笑いになり、あれにふれるとホンマに長生きするのう、と仰有るのである。

これと同じ意味のことは長屋の八さんが年中喋っているのだあ

った。けれども、長屋の八さんはてんで悟りをひらかないから、八さんがこんなことを喋る時のだらしない目尻といったら洵まことに言語道断である。実にだらしなく相そうごう好こうくずしてへッへッへとおでこを叩き、たちま忽ち膝を組み直したりするけれども、八さんの話をきいていると、八さんの肉体などはてんで意識にのぼらない。こつちも忽ちニヤニヤして八さん以上に相好くずして坐りなおしてしまうのである。どうも悟りをひらかないてあいというものは仕方がない。夜の白むのも忘れて喋り、翌日は、酒ものまずに、ふつかよいにかかっている。

ところが高僧のお言葉ときては、そういう具合にいかないのがある。こつちも忽ちニヤニヤして、てもなく同感してしまうとい

う具合にいかない。お言葉と同時に、先ず何よりも高僧の肉体が、肉体の温顔が、のっしのっしと按吉の頭の中へのりこんできて、脳味噌を搔きわけてあぐらをかいてしまうのだ。按吉は、思わず目を掩おおう気持になる。悟りのむらだつ毒気に打たれた。時には瞬間慄然とした。

そのころ栗栖按吉に、ひとりの親友ができていた。龍海さんと云つて、素性の正しい坊主であつたが、まだ高僧ではなかつたから、痩せ衰えた肉体をもち、高僧なみに至つてよく女に就て論じたけれども、てんで悟りに縁がないから、肉体の温顔などは微塵みじんもなかつた。

龍海さんは坊主の学校で坊主の勉強しなければならぬ筈であつたけれども、坊主の足を洗いたいということばかり考えていて、金輪際坊主の講座へでてこなかつた。そうして、絵描きになりたいのだと言つていた。生憎、龍海さんは貧乏な山寺の子供で学資が甚だ乏しいから、生きて食うのもようやくで、とても油絵の道具が買えない。水彩やパステルなどでトランク一杯絵を書いてたが、呆れたことには、女の姿の絵ばかりである。按吉は龍海さんを見くびつていたわけではないが、坊主の絵だから南画のような山水ばかり想像して、とにかく風景が多いだらうと思つていた。そこで、按吉は驚いた。むしろ唸つた。絵が名作のわけではない。何百枚の絵を見終つて、女以外の風景画が、花一輪すら、なかつ

たからに外ならなかつた。

「僕は、女のことしか、考えることができませんので……」

びっくりした按吉をみて、龍海さんは突然まっかな顔をして、うつむいて言った。龍海さんは素性の正しい坊主だから、どんな打ちとけた仲になつても、あなた、とか、あります、という丁寧な言葉を使った。

龍海さんは痩せ衰えて、風に吹かれて飛びそうな姿であつたが、およ凡そ執拗しつよう頑固な決意を胸にかくしていたのであつた。それは、油絵の道具をきつと買つてみせるという、小さいなが乍らも凡そ金鉄の決意であつた。そこで食事を一食八錢にきりつめ、そのためには非常に遠い食堂へ行き、通学に四哩マイル歩き、そうして貯金を始め

たのである。愈々いよいよ予定の額になって、さて、油絵の道具を買いに行こうという瞬間に、盲腸炎になってしまった。入院し、実に貧弱な肉体ですなア、と医学博士に折紙つけられた挙句の果に、貯金をみんな、なくしたのである。

龍海さんは意気消沈、まったく前途をはかなんでいたが、或る日、再び元気になった。というのは、フランス帰りの放浪画家とふと知りあいになったからで、この画家の話によると、巴里まで辿りつきさえすれば、あとは一文の金がなくとも、なんとか内職で生きのびながら絵の勉強ができるという耳よりな話なのである。これは実際の経験談で、龍海さんを納得させる力があつた。

その日、ただちにその場から、忽然こっぜんとして、すでに龍海さん

は貯金の鬼であつた。一食八錢の食事も日に二度にきりつめ、あるときは一食にへらし、フラフラしながら学校へ来て、水をのみ、拾つた金も遠慮なく貯金した。

「今日、五十錢、拾いました。すぐ、貯金して参りました」

龍海さんは必ず按吉に白状した。まっかになつて、うつむいて、白状した。龍海さんの気持としては、誰かに白状しなければならなかつたに相違ない。巡査に白状するよりも、按吉に白状するのが便利であつたのであろう。拾つたとき早速郵便局へ駆けつける用意ではあるまいけれども、懷中に、年中貯金通帳を入れていた。こうして不退転の決意をもつて巴里密航の旅費を累積しはじめたのだが、同時に、忽ち、栄養不良の極に達して、亡者にちかい

姿になった。按吉は不安であつた。今度は盲腸どころじやない。念願の金がたまつた瞬間に、幽明境を異にして、魂こんぱく魄だけが水ものまず齒はしりして巴里へ走つて行きそうな暗い予感がするのである。然し龍海さんは落ちついていて、目的のためには、栄養不良もてんで眼中におかなかつた。

丁度そのころの話である。

龍海さんの先輩に当る一人の坊主——年の頃は四十二三、すでに所属の宗派では著名な人で、管長の腰こしぎんちやく巾着をつとめており、何代目かの管長候補の一人ぐらいに目されている坊主であつたが、これが何かの因縁で、ある日、按吉と龍海さんを引きつれて、浅草のとある料理屋で酒をのんだ。

坊主が般若湯をのむというのは落語や小咄こぼなしに馴染なじみのことだが、あれは大概山寺のお経もろくに知らないような生臭坊主で、何代目かの管長候補に目されている高僧は流石さすがに違う。却々なかなかもつて、八さん熊さんと同列に落語の中の人物になるような頓間とんまな飲み方はしないのである。

ここでも言いもらしてはならないことは、先ず、第一に、温顔であつた。この世に顔の数ある中で、温顔の中の温顔である。常に適度の微笑をふくみ、陽春の軟風をみなぎらし、悠悠として、自在である。声はあくまでやわらかく、酔にまぎれて多少の高声を発するようなことすらもない。洒脱しゃだつな応待で女中をからかい、龍海さんと按吉にさかんに飲ませて、自分は人につがえなければ

強いて飲むということがなかった。

さて、ここをでて、何代目かの管長候補は二人の青道心をひきつれて、待合という門をくぐった。

思うに何代目かの管長候補は、二人の青道心が、酔わないうちから女を論じ、酔えば益々女を論じ、徹頭徹尾女を論じて悟らざること夥おびただしい浅間しさをあわれみ、惻そく隱いんの心を催したのに相違ない。高僧はどのように、又、どの程度に、女色をたのしむべきか、という具体的な教育を行うつもりであったのだ。

芸者が来た。みんな何代目かの管長候補の長年の馴染で、芝居の話や、旅の話や、恋人の話や、凡そお経の話以外はみんなした。深夜になって、一同、待合の一室で雑魚ざこね寝した。朝がきた。顔

を洗つて、着物を着代えて、何代目かの管長候補は女の襟を直してやったり、女の帯をしめてやったり、熟練の妙をあらわして、二人の青道心をしりえにどうじやく 瞳若くたらしめた。

龍海さんも按吉も、何代目かの管長候補の厚意に対して感謝しないわけではなかつた。それはたしかに純粹な厚意であつたに相違ない。愚昧ぐまいな二人の青道心を、いくらかでも悟りの方へ近づけてやろうという、しかも芸者買という最も誤解され易い手段を用いて敢て後輩を導くという、容易ならぬことである。——けれども釈然とはできなかつた。どうしても、なにかしら、割りきれない暗さが残つた。

「なにかしら、割りきれないと思いませんか」按吉は龍海さんに

訊いた。

「割りきれません！ いい加減です！ 鼻持ちならない！」

そう答えて、龍海さんは、怒りのためにぶるぶるふるえた。二人はすっかり沈みこんで、がっかりしながら暫くめあてなく歩いていった。

あれぐらいのことをするなら、なぜ堂々と女と一緒にねないのだ。そういうことが先ず第一に考えられる。問題は、然し、決して、それではなかった。

たとい堂々と女とねても決して坊主は明朗にならない。按吉は思った。なにか割りきれない不思議な毒気は、単に女とねるねな

いの問題だけのせいではない。もつと、根本的なものである。坊主たちは、女を性慾の対象としか考えない。彼等が女から身をまもるのは、ただ、性慾をまもるだけの話である。

然し、俗人は女に惚れる。命をかけて、女に惚れる。どんな愚かなこともやり、名誉もすて、義理もすて、迷いに迷う。そのような激しい対象としての女性は、高僧の女性の中にはないのである。按吉は痛感した。どちらが正しいか、それはすでに問題外だ。迷う心のあるうちは、迷いぬくより仕方がないと痛感した。そうして、こう気がついてのち、肉体の温顔だとか、むらだつ毒気だとか、そういうものを持たない人を見直すと、みんな今にも女のために迷いそうで、義理も命もすてそうな脆もろさがあるのに気がつ

いた。

そんな一日。按吉は学校の門前で、一枚のビラをもらった。

トルコ語とアラビヤ語を一ヶ年半にわたって覚える。授業は毎日夜間二時間。そうして、一年半の後、メツカ、メジナへ巡礼にでかける。回教徒の志望者をつのるビラであつた。

その日から、締切の最後の日まで、按吉は真剣に考えた。メツカ、メジナへ行きたくなってきたのである。

そのころ彼は、ちようどある回教徒の聖地巡礼の記録を読んだ直後であつた。巡礼者の大群はアラビヤの沙漠を横断して、聖地へ向つて、我武者羅がむしやらな旅行をはじめめる。信仰の激しさが、旅行の

危険よりも強い。そこで、食料の欠乏や、日射病や、疫えきびよう病で、沙漠の上へバタバタ倒れる。その屍体をふみこえて、狂信の群がコーランを誦しながら、ただ無茶苦茶に聖地をさして歩くのである。

思いきって、沙漠横断の群の一人に加わろうかと考えた。そこに、命があるような思いがした。なにかノスタルジイにちかい激烈な気持であつたのである。

締切の日、彼は思いきって、丸ビルへでかけて行つた。そうして、講習会場の入口へ来て、再び決心がつきかねて、三度その前を往復した。トルコ人が、彼を見つめて、講習会場の扉をあけて、消えてしまった。

だが、彼はとうとう這入らなかつた。トルコ人の姿が消えると、ふりむいて階段を降りた。その理由は——彼は丸ビルへくる電車の中で、すぐれて美しい女学生を見たのである。目のさめる美しさだつた。彼の心は激しく動いた。

これでアラビヤへ行こうなどとは、大嘘だと思つたのである。そうして丸ビルの階段を降りながら、生れてはじめて本当のことをした感動で亢奮こうふんしていた。これから、いつも、こうしなればならない、と自分に言いきかせながら歩いていった。

その日から、彼は悟りをあきらめてしまった。龍海さんは巴里密航の直前に、女に迷つて、行方不明になつてしまった。そうして、生死が、わからない。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1990（平成2）年2月27日第1刷発行

底本の親本：「炉辺夜話集」スタイル社

1941（昭和16）年4月20日発行

初出：「文体 第二巻第五号（五月増大号）」

1939（昭和14）年5月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：砂場清隆

校正：宮元淳一

2006年1月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

勉強記

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>